



戦いはいかに語られるか：
エチオピア西南部クシ系農牧民ホールの戦いのイデオロギーに関する覚え書き

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006151

戦いはいかに語られるか

エチオピア西南部クシ系農牧民ホールの戦いのイデオロギーに関する覚え書き

宮 脇 幸 生

1 はじめに

本稿は、エチオピア西南部クシ系農牧民ホールの民族間の紛争が、どのような理由で始まり、どのようなプロセスで戦争にまで発展するのかを、彼らの語りを通して明らかにする。

東アフリカの牧畜社会における戦いについては、人類学者によって、多くの研究がなされてきた (Fukui and Turton 1977, Fukui and Markakis 1994, Kurimoto and Simonse 1998)。なぜ牧畜民は戦うのか。まず、希少な資源の獲得をめぐる争いに原因を求める説明がある。他民族のウシや放牧地などの社会的な資源をもとめて、戦いが行われるというのである (Tornay 1977)。第二に、社会や文化に内在するメカニズムに、戦いの原因を求める説明がある。たとえば、バクスターは、クシ系牧畜民ボラナでは敵を殺すことによって獲得される戦士としての名誉が、戦いを動機づけるという。また福井は、スルマ系農牧民ボディではお気に入りのウシのような社会的に価値のあるものを失った心理的な欠落感を埋め合わせるために、他民族の殺しが行われるという (Baxter 1977, Fukui 1977)。第三に、個別的な民族間の戦いを、長期間にわたる民族移動や民族同化のプロセスの一部としてとらえようとする見方がある (Turton 1977, 福井 1999)。この他にも、戦いじたいが、民族間の関係を維持する点に注目する研究がある。隣接民族との戦いが、エスニック・バウンダリーや民族のアイデンティティを維持すると論ずるのである (Turton 1994)。

ホールの民族間戦争の原因としてすでに、タッデセ・ウォルデが文化的なイデオロギーの重要性を指摘している。タッデセによれば、ホールは敵の血を求めて戦う。なぜならばホールには、豊穡性は外部からくるといふ考えがあるからである。敵を殺したのものには、穀物の豊作、家畜の多産、そして多くの子供がもたらされると考えるのである (Taddese 1997)。ホールはこれを、「敵を殺すのもよい。敵の女をめとるのもよい。敵の血は甘いのだ」と言う。

人類学者たちが牧畜民たちの戦いの意味を、文化や社会、民族間関係から明らかにしようとしているときに、歴史学者たちは、戦いの別の側面に注目してきた。それは、19世紀後半から浸透してくる、植民地主義勢力の影響である (Collins 1961, Garretson 1986)。本稿があつかうエチオピア西南部、それにスーダン東南部、ケニア北西部のあたりは、イギリス植民地政府とエチオピア帝国のフロンティアであり、角逐の場であった。ここに居住する牧畜民たちは、こうした侵入者に抵抗して戦っただけでなく、どちらかの勢力と連携することで、他の民族に大規模な攻撃をしかけたりしたのである。

歴史学者たちの明らかにしたことは、国家や植民地主義勢力という新たな力の侵入により、この地域の従来のパワーバランスが崩壊し、それによって暴力の頻発する状況が生じたということである。もしそうであるならば、この地域の民族間紛争の原因を、資源の争奪や文化に内在する動機づけのみから説明する従来の人類学の視点は、再考をうながされるはずだ。しかし、この辺境地域のダイナミ

ックな変遷は、いまだ人類学者の手によって十分に咀嚼されているとはいえない。つまり、絶えざる外部からの政治的圧力の影響を、現地の人々の語りに読み込むという作業が、なされていないのである。

ホールの戦いのイデオロギーを見てみよう。確かに彼らは、「敵を殺すのもよい。敵の女をめとるのもよい。敵の血は甘いのだ」と言う。しかし彼らがしばしば希求する「甘い血を持つ敵」の殺害は、ホールの戦いの歴史を検証するならば、ほんのわずかな割合しか占めていないのである。語りのレベルでの表出と、現実の行為の間には、乖離があるのだ。なぜこのような乖離が生じたのか？そしてこのような乖離があるにもかかわらず、なぜ特定の言説が語られつづけるのだろうか？人類学が目指すのは、このような、イデオロギーと実際の戦いの間にある矛盾を明らかにし、戦いのイデオロギーの機能自体を歴史的文脈の中で解釈することであるはずだ。

しかし本稿は紙数が限られている。本稿では、民族間紛争がどのようにして生成し、いかにして戦争に発展してゆくのかを、ホールの語りを通して明らかにする。ここで提示されるのは、ホールのイメージする民族間戦争のありかたである。すなわち彼らの抱く戦いのイデオロギーが提示されるのであり、これは別稿で歴史的文脈に照らして再解釈されねばならない。

次節では、ホールの居住地の生態学的環境と、彼らをとるまく民族集団について述べ、ホールの戦いのイデオロギーを理解するための背景的な知識を提示する。第3節では、ホールの戦いについて、戦いの動機、戦いのプロセス、そして戦いの後の儀礼について示す。結論では、ホールの戦いに関するイデオロギーについてまとめた上で、イデオロギーを歴史的文脈の中でどのように解釈するのかについて示唆したい。

2 ホール

ホール (Hor) はエチオピア西南部の南オモ郡 (South Omo Zone) に居住する人口3000人ほどのクシ系農牧民である。ホールの居住地域は標高500メートルほどの低地であり、北の山岳地帯から発したウェイト川 (*limo*) が南へ向けて流れている。この川はホールの居住地のすぐ南で大きな湿原となっており、さらにその背後には広大な不毛の平地が広がる。この平地は国境を越えてケニアの北部に続いている。ウェイト川の両岸は細長い沖積平野となっているが、さらにその両側は1500メートルを越える山岳地帯となっている。東の山岳地帯にはクシ系牧畜民ボラナ (Borana) が、西の山岳地帯にはオモ系農牧民ハマル (Hamar) が住んでいる。またホールの居住地域の北は、クシ系農牧民ツァマコ (Tsamako)、北西にはクシ系農牧民のワータ (Waata) が住む。

ホールの居住地域は半乾燥地帯で、年間の降雨量は200~600ミリと推定される。しかし年に2回の雨季には、ウェイト川が北の山地の雨を集め、大規模な氾濫を起こす。氾濫が引いた後の氾濫原をホールはホール (*hor*) とよび、ここでモロコシを初めとする穀物を栽培する。冠水のおよばないサバンナはアバール (*abar*) とよばれ、ウシ、ヤギ、ヒツジの牧畜キャンプが多数遊動している。

ホールは4つの地域集団に分れており、それぞれが定住集落を持つ。もっとも北の地域集団をガンダラブ (Gandarab)、その南に位置する集団をクラム (Kulam) といい、この二つをあわせてアルボレ (Arbore) という。さらにその南にある集団、ムラレ (Murale) とエグデ (Egude) をあわせて、マルレ (Marle) という。それぞれの集団は、政治的、経済的、儀礼的に独立した集団である。ガンダ

ラブのすぐ北には、クイレ (Kuile) という、ツァマコの首長の住む村落がある。

ホールの地域集団には、ヘル (*herr*) とよばれる世代階梯を中心とした、実年齢にもとづく年齢組織と、厳密に世代によってメンバーが決まるルバ (*luba*) という世代組織がある。ルバの世代組織は、もっぱら婚姻の儀礼にかかわる。それに対してヘルを中心とする年齢組織は、地域集団を政治的に統制する。中心的世代階梯ヘルは、およそ30年の年齢幅からなり、そこから地域集団を政治的、経済的に統制する評議員集団 (*jaldab*) や、その元で氾濫原を分配する集団 (*mura*)、逸脱者を捕らえて懲罰する集団 (*danto*) が選出される。ヘルを形成する以前の若者たちは、年齢幅約8年の年齢組 (*jim*) を組織する。それぞれの年齢組にも、儀礼首長、政治首長、評議員集団、懲罰者集団がいる。これらの年齢組が順次4組形成されると、ヘルを形成する30年に一度の大儀礼 (*ngaar*と*chirnaan*) が行われる。すべての政治的な命令は、これらの年齢組織を通じて、「年長」のヘルから「年少」の年齢組へと伝達される。

ホールのそれぞれの地域集団は、各自の長老集団の上に、カウォット (*kawot*) とよばれる儀礼首長と、ケルネット (*kernet*) とよばれる政治首長をいただく。儀礼首長は、神と人々との間を仲介し、その豊穡をもたらす力と、呪いをもたらす力は、人々に畏怖されている。なかでも、クイレに住むツァマコの首長、ガンダラブの首長、そしてクラムの首長は、非常に強力な力があると考えられている。政治首長は儀礼首長と評議員集団の仲介役をする。

ホールは自分たちの周辺に分布する隣接民族を、いくつかのカテゴリーに分類している。ひとつは、ホールが宿敵 (*nyab*) だとみなしている民族である。敵とは誰かとホールに聞くと、真っ先にかえってくる答えは、マーレ (*Maale*) とコレ (*Kore*) である、というものだ。マーレとは、北の山岳地帯に居住するオモ系農耕民である。ホールからマーレの居住地域の南端まで、直線にしても50km以上の距離がある。ホールとマーレが、いつ、どのような理由で敵となったのか、誰にもわからない。自分の曾祖父の時代から、ずっと敵である、と言うのみである。コレ (あるいは、コロ (*Koro*)) は、現在ケニアの北部に住むナイル系牧畜民サンプル (*Samburu*) のことである。かつてエチオピア帝国が侵入する以前 (19世紀末以前)、コレはホールとしばしば戦った。しかしその後、コレは南に撤退して行き、現在ではあいまみえることはない。

ホールにとって、敵とは、問答無用で殺すべき相手である。殺した相手が男ならば、そのペニスを切り取って持ち帰る。ホールは、敵を殺すのはよいことであるという。なぜなら、敵を殺したものには、多くの幸運がもたらされるからだ。彼の穀物は、豊かに実る。ウシは多くの乳を出し、家畜は増えていく。さらに妻は多産となり、殺した者の寿命も延びる。このような豊穡の力は、たんに敵の男を殺すことによってのみ、もたらされるのではない。敵の女性も、このような豊穡性を持っているものと考えられている。だから戦場で若い女を手にしたならば、彼女を連れ帰り、ホールの男の嫁にする。すると彼女は多くの子供を産む。敵の家畜も同様である。略奪して来た家畜は、多産であり、たくさんの子孫をもたらすのである。

このような豊穡の力は、ホールが敵の中に認めているだけでなく、敵もホールの中に認めている、とホールは考えている。だから、敵はホールを見ると、喜んで殺し、ペニスを切り取るのである。なぜならそれが、彼らに豊穡をもたらすからである。ホールは、「敵の血は甘い。」という。しかしそれだけではない。自分たちの血も、敵にとって甘い、すなわち「われわれの血は、互いに甘い」という

のである。こうして敵同士は、互いの血を求め合う。

現在では、ホールの東の山岳地帯に住むクシ系牧畜民ボラナが、「敵」であると考えられている。ボラナとホールは、かつては友好関係にあり、ホールにはボラナ出自のリネージもたくさんある。しかし1990年代から関係が悪化し、いく度かの戦闘を行ない、双方に死傷者が出ている。ボラナの血は、マーレやコレほどではないが、豊穡をもたらすと考えられている。

これらの敵たちとは対極の位置にあるのが、ハマル、ツァマコ、ワータなどの民族である。ホールは彼らを殺すことを嫌う。それは彼らの「血が熱い」、つまり、穢れがあるからである。ホールは彼らを殺すのを嫌うだけでなく、結婚することも嫌う。殺すにせよ、結婚するにせよ、彼らの血は、ホールに災いをもたらす。穀物は枯れ、ウシは乳を止め、妻は子供を産まなくなるのである。

三つ目のカテゴリーは、通婚し、友好的な関係を持つ民族である。ホールの南西にあるトゥルカナ湖の北岸に住むクシ系農牧民ダサネッチ (Dassanetch) が、このカテゴリーに入る。彼らはホールの南の集団であるマルレと通婚関係を持っている。現在は直接の交流はないが、ケニア北部のクシ系牧畜民ガブラ (Gabra)、ダサネッチの北に住むナイル系農牧民ニャンガトム (Nyangatom) もこうしたカテゴリーに入れられる。これらの民族の女性は多産であり、また家畜も多くの子供を産むのだと考えられている。なお現在「敵」とみなされているボラナも、つい最近までこのカテゴリーにふくまれていた。

さて、こうしたホールの近隣民族の分類は、彼らと近隣民族との関係を規定する規範を含んでいる。敵は、殺し、家畜と女を奪うべき相手。不浄な民族とは、共存するが、殺したり結婚したりしてはならない者たち。友好民族とは、通婚し、共存すべき人々。もちろん彼らを殺してはならない。

しかしじっさいには、こうした規範どなりに民族間関係が維持されているわけではない。たとえばホールはハマルを殺すことを嫌っているにもかかわらず、1940年代から70年代にかけて30年間も断続的に激しく戦っている。この間双方に多数の死者を出し、ウシも互いに略奪しあっている。またボラナとは、友好的な関係にあったにもかかわらず、この10年間で、敵対関係に転じようとしている。1991年にボラナが大部隊で略奪に来たときには、ホールは待ち伏せして100人以上を殺した。さらにその後、ホールはボラナへむけて、2度の大規模な略奪を試みている。

それではこうした民族間の戦いは、どのような理由により生じ、どのようなプロセスで発展するのだろうか。そしてそれらは、文化の中でどのように意味づけられるのだろうか。次にホールの戦いの全体像を、一般化したかたちで提示しよう。

3 ホールの戦い

ホールは戦争のことを、ナーン (*naan*)、あるいはドゥル (*dul*) とよぶ。これらは、いずれも周到に準備された戦いである。長老集団と儀礼首長の裁可を受け、4つの地域集団にわたって戦士が動員される。個人ごとの呪術の力の強さや、手にする武器の種類により、攻撃のさいの分業体制が決められる。そして略奪品の分配も、一定のルールに従って行われる。

しかしこのような略奪の遠征が組織されるのは、民族間の紛争があるていど高まってからである。それならば、どのようにして民族間の紛争は生じるのか。そしてそれは、どのようなメカニズムで大きな戦いに発展していくのだろうか。またこれらの戦いは、文化的にどのように意味づけられるのだ

ろうか。

ホールの理想的な近隣民族の分類によれば、敵とは互いに血を求め合う関係にある民族であり、それによって相手を殺すことじたいが戦いの理由になるはずである。しかし、現実の戦いはそうではない。第一に、戦いを生じさせる内発的な動機づけには、これ以外にもいくつかのパターンがある。そして第二に、さまざまな紛争を引き起こす政治的な状況がある。これが第一の動機づけにさまざまな形でかかわり、具体的な紛争を引き起こすのである。

ここでは、まず戦いを生じさせる動機について説明し、それがどのようにして民族間の紛争に発展してゆくのかについてみてゆくことにする。

(1) 戦う理由

(A) 豊穡の力を求める殺人

タデッセによると、ホールがレイディングにおもむく理由は、敵を殺すことによってもたらされる豊穡の力を求めてであるという。以下に示すのは、聞き取り当時、推定年齢が80歳くらいの老人の語った、マーレへのレイディングの回想である。これが実際に行われたのは、1950年前後のことだと思われる。

【 】内は筆者の質問。()内は筆者の補足。以下引用は同様)

【あなたはマーレと戦ったことがあるのですか？】

われわれの世代組もマーレと闘った。わしもその中におった。3度闘った。(最初の戦いでは)ホールは10人いた。途中でギスマ(Gisma)とゴネ(Gone)のツァマコの友人を誘って同行させた(ギスマもゴネも、ウェイト川沿いのツァマコの集落。マーレの地への通り道になる)。彼らは道を知っている。

マーレに着くと、戦闘を始めた。人を殺すことはできず、ヤギを奪って帰った。

しばらくたった。

わしの兄と共に、ふたたび戦いに発った。攻めた。マーレを5人殺した。子供を4人、大人を1人殺した。大人のマーレを殺したのが、あのクラ(Kura)という男だ。ウシを半分、奪って帰った。

しばらくたった。

3度目の戦いに発った。攻めた。1人を殺した。ウシも奪って帰った。

これをしたのは、イタリアが去って、かなりたってからだ(第二次世界大戦時、イタリア軍はエチオピアに侵攻し、ホールにも駐留していた)。

【なぜマーレに略奪に行ったのですか？】

マーレの血とわれわれの血は、互いに求め合う。マーレを殺した人の持ち帰るペニス(*musu*)で、儀礼首長がメエ・ファキン(*mee fakin*)という儀礼を行う。

【略奪で求めるのは、マーレのウシではなくて血なのですか？】

そうだ。マーレを殺した人は、子供も増えるし、ウシも増える。

【マーレへの襲撃は、どのように始まるのですか？】

最初に略奪を立案するのは、青年たちである。マーレに略奪に行こうと言う。それから、若いも戦いに行くのだ。マーレを殺し、ペニスを持ち帰った人から、(ペニスを)ウシで買い取り、メエ・ファキンを行う。

ウシを略奪したら、分配をする。

こういうわけだ。

このように、マーレへの略奪は、相手を殺すことが第一の目的とされる。その血が豊穡をもたらすからである。さらに、この語りにも述べられているように、その血の可能性を十分にひきだすには、メエ・ファキンという儀礼が行われる必要がある。これについては、後に述べることにする。

(B) 威信を求める殺人

東アフリカのいくつかの社会において、狩猟と戦争が似通ったものとみなされていることが、いくつかの研究によって報告されている。このことは、ホールにもあてはまる。敵を殺すことが、野性の猛獣を殺すのと同じような威信を、殺人者に与えるのである。以下に示すのは、1980年代の末に、なぜホールとボラナとの間に紛争が発生したのかについて、ボラナへのレイディングに参加したことのある青年が、その端緒をのべたものである。

【ヒロ (マルレの青年) がボラナに撃たれる前にマルレがボラナを殺したんだろ。何故だか知ってるか？】

少年たちは、同世代だった。狩りをしにゲレブ (ダッサネッチ) のほうまで行く。ゲレブに行くと、ボラナがあちらからやってくる。(狩りをしていたが獲物を得られず) 歌を歌いながらやってくる。それを見て、ボラナを撃とうということになった。別に敵意があるわけではないが、同世代ということで殺すことを好むんだ。ここはホールから遠いところだから、殺したのはわれわれではなく、ハマルだということになる。そう考えて殺した。

マルレは15人ほどもいた。ボラナを殺せるだけ殺そうとした。夜中に来て、撃った。一人が傷を受けたが、帰り着いてから死んだそうだ。

【何でマルレはボラナを殺そうとしたんだ？】

ずっとずっとむかしから、森 (村落外の無人のブッシュ) ではハマルがいたら、殺すことができる。ボラナもいたら、殺すことができる。ボラナもわれわれを見つけると殺す。ボラナも野獣を求めてやってくる。アルボレも野獣を求めてやってくる。そこで最初に出くわした人間を殺すんだ。

【出くわした人間が、ボラナでなくてハマルでも殺すということか？】

殺すとも。ハマルも殺す。アルボレも殺す。ボラナも殺す (異民族同士が互いに殺しあう)。森に来た人は、誰であっても、殺す。誰が殺したかも分からない。

【何で殺そうとするんだ？】

父親のころから、人を殺すと胸に癩痕を彫らないか？人を殺すと勇者 (baret) であるという。男だと言う。それが理由だ。

【あんたの父親のころは、戦争で沢山のハマルを殺したけれど、その人は勇者になるのか？】

なるとも。

【まるでゾウなんかを殺したようなものか？】

そのとおりだ。ボラナもハマルも殺すことができる。ハーロ (敵を殺したいという気持ち) を求めて。ハーロとは、たとえば、同世代の友人とか兄弟とか、ボラナを殺すと、ハーロといって、気持ちの鬱屈した状態になり、あいつも人を殺したのだから、俺も人を殺そうと考えるのさ。

ここでは、敵を殺すことと、狩猟で猛獣を殺すことの共通性がはっきりと述べられている。青年の語りからも明らかなように、ハマルにしろボラナにしろ、狩猟の遠征の途中で出会った異民族を殺すことは、獰猛な野獣を殺すことに等しいものと考えられているのである。

敵や猛獣を殺すことは、青年の間で大きな栄誉となる。この栄誉は、殺した当事者に、身体的な影響さえも与える。彼らが村に帰り、そこで殺しをたたえる歌を歌うとき、彼らの身体は細かく震えている。この状態はシ・アウ (si au) とよばれ、興奮状態にあるときに身体がおちいる状況だといわれる。この状態が亢進すると、トランス状態 (rinnyu) となり、身体の抑制が失われる。シ・アウは、しばしば攻撃的な状態と関連づけられる。たとえば、レイディングにおもむく戦士は、この状態になる。それだけではない。敵や猛獣を殺した知人をたたえる若者は、しばしばまだそれを成し遂げない自分を振り返り、悔しさと将来自分の行う殺害を夢想して、シ・アウの状態になるのである。

勇猛さは男性に期待される文化的特質となっている。母親は男の子を産むと、そのしるしに小さな羽根を頭につける。これは将来子供が敵や猛獣を殺すことを予期して、そのときに頭にたてるダチョウの羽根を先取りしてつけるのだという。

新たな世代組が形成され、それが中心的な年齢階梯に参入するンガール (ngaar) という儀礼では、参加者はみな、ダチョウの羽根を頭にたてて、あたかも敵や猛獣を殺したもののような扮装をする。このとき7人の牧畜キャンプの守護役が選ばれる。選任の儀礼では、牛肉を壺で煮て、その煮汁に槍を突き入れる。選ばれた者たちは、その煮汁を飲み、彼らを取り囲む他の参加者から、「この世代組の槍 (naan, これは戦争も意味する) は、お前の肝臓にとどまるように」ということばを受ける。このときも儀礼に参加している者たちの身体はシ・アウの状態となり、細かく震えている。このように、男性の年齢組織も、戦士のエートスの形成と密接に結びついている。

(C) ウシの盗みにともなう殺人

ウシの盗みを行うときに、牧畜キャンプにいる異民族を殺害することがある。この場合は殺人よりも、ウシの盗みが主目的となる。以下に示すのは、ボラナとの関係が悪化しつつある1990年代の初頭に、ホールがハマルとともに、ボラナの牧畜キャンプにレイディングを行ったときのようなすを述べた

ものである。

【なぜボラナの牧畜キャンプにレイディングに行こうということになったんだ？】

最初にレイディングをしようと言った男は、ウシをここからハルギレ（Halgile ホールのテリトリーの南東部の地名。放牧地。ボラナの住む山岳地帯のふもとなる）のほうへ連れていっていた。ここではボラナとホールのウシがともに水を飲んでいる。地面に穴を掘った水場がある。そこで盗みが生じた。ボラナのウシがホールに入ると、盗まれる。（ボラナのウシは）たくさんいるので、ホールに入るウシもいて、それが盗まれる。（ホールは）ウシを盗むと、ハマルに預けておく。ハマルもチャルビ（Chalbiホールのテリトリーの南に広がる平原）のほうへ来て、ボラナのウシを盗む。ハマルとホールは共謀してボラナのウシを盗む。

…（ボラナは政府にそのことを訴えて）話し合い、集会を開いた。ボラナたちはやってきて、盗まれたウシを取り返した。盗んだものは捕らえられ、盗みはいけないと（和解のために）1頭の去勢牛を屠殺し、（ボラナもホールもともに）食べ始めた。

しかしそれに参加しなかったハマルとホールの男たちは、ワンギ（Wangi ボラナの放牧地）というところへ、ウシを盗みに行った。そこの（ボラナの）牧畜キャンプにはほとんど人がおらず、10人程度であることを確認した。そこで、盗むのではなく、攻撃しようということになった。こうなった理由は、ウシを盗みたいという思いが強かったからだ。…（盗んだ後に政府に訴えられて）、もし集会が開かれると、そこにいる人々はすべてその集会に出なければならない（そして、ウシの返還を求められる）。そういうことがないように、誰もウシを請求しないように、皆殺しにしまえということになった。そこにいるもの全員を殺してしまえば、だれが文句を言うだろう。こうして攻撃した。

【ボラナのウシをホールとハマルが盗んでいたんだな？それで牧畜キャンプの牧童が少ないので全部ウシを盗もうとしたのか？】

ボラナはウシを盗んでいない。ボラナのウシをホールとハマルが盗んでいたんだ。そして盗もうとただけでなく、みな殺してしまおう、戦争をしかけようとしたんだ。ウシはたくさんいるし、人は少ない。俺も見てきた。ただそれをしようとしたのは、ホールではなくてハマルだ。

もしそうしなければ、後から集会が開かれ、お前は盗人だ、お前は盗人だと告発されていく。

【それ（集会）は政府がするのか？】

政府がするんだ。政府が法でもって要請してこなければ、今は乾季だろう、ボラナが自分たちでやってきて、俺たちを攻撃するだろう。そして略奪していく。あいつらは自分たちがどれくらい損害を受けたかを知っているからな。後から（ボラナは）俺たちホールとハマルを攻撃するに違いない。だから前もって攻撃してしまえ。ウシも奪ってしまえということだ。

当時ホールはハマルとの戦争は和解儀礼によって終結しており、ボラナとの紛争も、まだ決定的な局面を迎えていなかった。ホールのテリトリーの南には、氾濫原の周囲に広大な牧草地が広がっている。標高が高く降雨の不安定な山岳地帯に住んでいるボラナとハマルにとって、雨季に定期的に冠水

するホールの氾濫原は、非常に魅力的な放牧地である。だからここには、ホール、ハマル、ボラナの家畜群が集まることになる。

ハマルとボラナは宿敵であり、互いにしばしば盗みや殺しを行っている、とホールは言う。このときも、ハマルのレイディングにホールが便乗するかたちで、襲撃が行われた。目的は殺人ではなく、ウシの盗みである。しかしあとから政府を通して賠償を求められないように、牧畜キャンプの牧童たちを殺したのである。

(D) 復讐のための殺人

民族間で紛争が発生し、いくつかの殺傷が生じると、傷つけられたり、殺された側は、敵に対する復讐の念をいだく。ホールでは、復讐をすることを、「ハーロ (*haalo*) を出す (払う)」という。ハーロとは、激しい感情の高ぶり (*onne*) が、敵を殺害するという明確な目的にむすびつけられたときの内面の状態をさす。だから、自分の同輩が敵を殺害して、その栄誉をたたえられたときに、それを成し遂げていない自分のふがいなさに鬱屈した感情をいだき、それがハーロとなることもある。しかし、それがもっとも頻繁に生ずるのは、敵に自分の肉親や、友人を殺されたときである。このときのハーロには、「復讐の念」ということばがぴったりとあてはまる。

ホールは敵対民族との戦いにおいて、相手に殺されることを不名誉だとは考えない。むしろ、ウシを略奪しようとしたり、守ろうとして死ぬことを、「ウシの糞になった」という。そして戦場で死ぬことは、「良いこと」とであると考え。なぜこれを「良いこと」と考えるのだろうか。

ホールはふつう、天寿を全うしたり病気で死ぬ場合は、神 (*waak*) に命を奪われたと考える。この場合は、たとえ牧畜キャンプにいる場合でも、死体は必ず所属する地域集団の集落に運ばれ、込み入った儀礼をおこなったうえで墓地に埋葬される。墓地はちょうど定住集落のように、クランごとに埋葬地が決まっている。まさに現世集落の他界版という構造である。神によって命を奪われる死は、不可逆的であり、死者の魂 (*malaika*) が儀礼によって他界に移行することで完結するのである。

いっぽう、戦場で死んだ場合は、遺体をそこに放置する。そしてハゲタカやハイエナが食べるにまかせるのである。遺体はまるで、結界 (*marsha*) のようにそこに残される、という。死者の家では、ヤギを屠殺して、外に投げ捨て、ヒツジを一匹供犠するだけである。この場合、死は完結しない。ホールは、あたかも死者は生きていたようなものだ、という。なぜなら、その死は彼の兄弟や子供たちにハーロを生じさせ、その借りを返させるように仕向けるからである。ハーロを通じて、死者は復讐する生者の中に生きつづけるのである。

肉親が殺されたときは、当人が復讐の念を強くいだくだけでなく、周囲からもその借りを返すようにと言われる。自分の父親が敵との戦いで死んだ場合、母親は息子に、その復讐をすべきことを、くりかえしくりかえし言い聞かせる。復讐をせねば、男性として認められない。こうして、一度紛争が生ずると、肉親を殺された者は何年にもわたって復讐の機会をうかがい、紛争じたいも長期化するのである。

人々を異民族との戦いにおもむかせるこれらの動機は、具体的な状況では複合して作用している。しかしそれぞれの動機には、一貫した文化的な論理がある。

次に、じっさいに紛争が生じたときの、戦いのプロセスを見てみよう。

(2) 戦いのプロセス

(A) テリトリーの防衛

ハマルやボラナのように、隣接民族と緊張関係にあるときには、相手からのレイディングを避けるためにいくつかの方策がとられる。敵の攻撃は多くの場合、牧畜キャンプに対してなされるので、牧畜キャンプの防衛が基本となる。

1. 牧畜キャンプの守備を固める

敵対民族のテリトリーとの境界付近の牧畜キャンプで過ごす牧童は、自動小銃を携行して敵の襲撃にそなえる。通常はともに牧畜を行う未婚の少女たちは、定住村落に帰されることもある。また、牧畜キャンプを、敵の襲撃から守りやすい形に構築することもある。図1のキャンプは、ボラナのテリトリーに近い、川の東岸に作られていた。これは、ボラナのやってくる東側の方角に二重の生垣をつくっている。夜は内側の囲いに牛を入れ、外側、内側とも囲いの出入り口はとげのあるアカシアの木で閉ざす。ボラナが襲撃してきたときに、背後にウシを逃しやすい構造にしてあるのである。

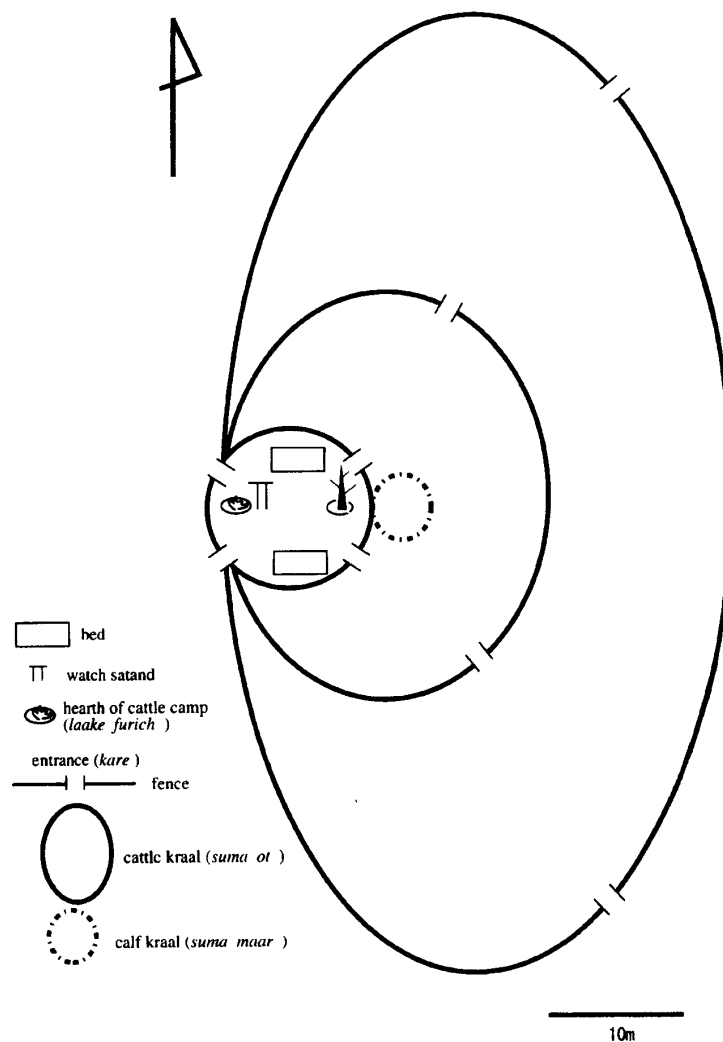


図1 戦いに備えた牧畜キャンプ

2. 監視人を巡回させる

敵のやって来そうなあたりを、何人かで巡回して監視する。この監視人をコブ (kob) という。監視人はいくつかの牧畜キャンプから交代で出ることもあれば、定住村落から長老集団の命令によって派遣されることもある。若手がその任にあたり、一日ごとに交代する。監視人たちは、つねに足跡に気を配っている。ことに、踏み後を横切るような足跡には、気をつける。これは人に見られないように、茂みに隠れつつ移動する者の動きだからである。また住居のないところで固まって踏み荒らされたような跡は、異民族が休息したり露営した跡なので、これも要注意である。そして足跡を発見すると、かならずその跡を追跡する。ホールは、足跡を見るとどの民族のものかがわかるという。このあたり一帯の牧畜民は、自動車のタイヤを廃物利用したサンダルを履いている。民族によって購入するマーケットが異なるので、タイヤのパターンも異なり、サンダルの足跡も異なるのである。またボラナのように山岳地帯に住む牧畜民のサンダルは、岩がちのところを歩くので、裏が磨り減って滑らかになっている。これも、足跡を見分けるポイントだという。

3. 敵側の情報に注意をする

ホールと敵の双方を仲介する中立的な立場の民族からもたらされる情報は、敵の襲撃を予想する上でたいへん重要である。ボラナと敵対している場合は、ワータやコンソが、こうした役割をになう。1991年にボラナの大規模な襲撃があったときは、ボラナのテリトリーにあるテルテレ (Teltele) という町の酒場で、ボラナの戦士たちが襲撃の何日も前から酒を飲んで氣勢を上げていた。たまたまそこにいたコンソの商人がそれを目にして、計画をホールに伝えた。そのためホールは事前に塹壕を掘って襲撃に備え、やって来たボラナを待ち伏せして狙い撃ちし、甚大な被害を与えた。このような仲介者のいないハマルとの戦いでは、ホールはしばしば奇襲攻撃を受け、敗走した。

4. 占いによって敵の襲撃を予知する

現在ホールには、雲占い、ハイエナの声占い、鳥の声占い、松脂香料の煙占い、サンダル占い、憑霊占いなど、多数の占い師がいる。これらの占い師はしばしば敵の襲撃を予知し、牧畜キャンプの移動を指示する。1998年の乾季に、川の左岸、ボラナのテリトリー近くで放牧していた牧畜キャンプが、いっせいに対岸に移動した。これは占い師が、赤い月が出たのを見て、ボラナの襲撃が迫っていると予言したためだった。

(B) 敵のテリトリーへの襲撃

ホールでは、敵のテリトリーにある牧畜キャンプへ襲撃するときには、周到的な準備がなされる。攻撃はたんに物理的な力によるものだけでなく、呪術的な力もたいへん重視される。呪術的攻撃の中心となるのは、儀礼首長である。だから襲撃も、儀礼首長をはじめとする長老たちの認可が必要となる。

1. 襲撃の提起と、長老による認可

レイディングをしようと提起するのは、多くの場合、若者たちである。若者たちは牧畜キャンプにおり、相手方の牧畜キャンプの動きにくわしい。また敵対民族の同世代の若者に対して強い敵愾心が

ある上に、敵を殺すことによって、自分の威信を高めたいと考える。若者たちは自分たちでレイディングの計画を立てると、それを自分の地域集団の評議員（jalaab）たちにもちかける。評議員たちはレイディングをすることが適切か否かを相談した後、他の長老たちにもはかり、最終的に儀礼首長の裁可をあおぐ。

血気にはやる若者たちが、長老たちの認可を得ないままに他民族を殺したり、レイディングに出かけたりすることがある。その場合は、さまざまな形で制裁が下される。

【例1】

1950年代の末、若者たちがボラナへのレイディングを提起した。しかし当時、ホールはハマルと緊張状態にあった。ガンダラブの儀礼首長エル（Eru）は、ホールがボラナ、ハマル両民族とどうじに対立することを懸念し、それに反対した。しかし、イタリア軍駐留時代に2度ほどボラナへのレイディングをおこない、成功したことに自信を持っていた若者たちは、制止をふりきって出かけた。そして激しい戦闘の後、ウシを奪った。しかしそこへ雷が落ち、奪ったウシはボラナのほうへ逃げて行った。一人が戦死し、もう一人が負傷した。若者たちはほうほうのていで逃げ帰った。落雷は儀礼首長の呪いのせいだといわれた。

【例2】

1960年代の末、ハマルと戦争状態にあったときのこと。後の共産主義政権時代に地方行政官になりたいへん指導力のある若者がいた。彼はハマルに殺されたホールの復讐をするという名目で、他の若者を連れてボンコレ（Bonkole）地域のハマルの牧畜キャンプを襲い、ウシを奪った。このレイディングは、長老たちの認可を得ていなかった。それに、戦争状態にあったハマルは、アシレ（Asile）地域のハマルであり、ボンコレのハマルではなかった。長老たちはこれを問題とし、若者を捕らえてさんざんにむち打った後、罰として去勢牛を一頭供出させ、共食した。

【例3】

1990年代初頭、ホールはハマルとともにボラナの牧畜キャンプにレイディングを行った。ホールの参加者の大半は、マルレの若者だったが、ガンダラブの若者もその中にいた。ガンダラブの儀礼首長であるエルバンネ（Erbanne）のもとには、ボラナが毎年恭順の意を表すために、ウシとヒツジをもって来ていた。自分の判断をあおがずに、友好関係にあるボラナに対してレイディングパーティーが出発したことに、エルバンネは激怒し、呪いをかけた。遠征の途中で銃が暴発し、それを持っていた若者は、足を失った。

【例4】

1990年代初頭、クラムの若者がハマルの若者を殺した。当時ホールでは、ボラナとの関係が悪化してきており、反対側に住むハマルとも再び戦闘状態となり、挟み撃ちにあうことを非常に懸念していた。このころはちょうど共産主義政権が崩壊した後で、民族間の紛争を調停する地方政府の能力が麻痺していた。そこで長老たちは、命令を下してクラムの若者を捕らえさせ、ハマルに引き渡した。ハマルはこの若者を殺し、関係の悪化は回避された。

このように、ホールでは戦いは、基本的に、年齢組織によって是認され、統制されたものであるべきだという規制が強力に働く。若者の行動がしばしば戦いを生じさせるが、これは長老たちによって

コントロールされねばならない。これから逸脱したものは、儀礼首長による呪いや、評議員集団の命令による制裁によって処罰されるのである。

2. 偵察隊の派遣

レイディングの提案が長老たちに受け入れられると、襲撃の準備が進められる。最初に行われるのは、斥候の派遣である。斥候をホール語では、「見る者 (*dooya*)」という。4～5人の若者が集まり、ヤギを屠殺して村の外で共食する。そして、敵地に偵察に行くのである。

斥候は、夜陰にまぎれて敵の牧畜キャンプを偵察する。いくつの牛囲いがあるのか、牛囲いがどのような構造で作られているのか、キャンプを守る牧童は何人いるのか、その中で銃を持っているのは何人かを、つぶさに観察する。この偵察は一日では終わらない。翌日は別のキャンプを偵察に行く。さらに、キャンプの偵察が終わると、そこから離れた木陰に隠れ、ウシの放牧を観察する。そこでウシがぜんぶで何頭いるのか、どこで草を食み、どこで水を飲むのかを確かめるのである。

斥候はさらに、襲撃と撤退のルートもしっかりと確かめる。レイディングの本番で、パーティを先導するのは、彼らの役目となるからだ。ルート途中で、人やウシの水のみ場を確認することも、重要な任務の一つである。

これらいっさいを確認すると、斥候はねらいをつけた牧畜キャンプのウシの、新鮮な糞 (*charkot*) を持ち帰る。これは、敵のキャンプを偵察してきたことの証拠となるだけでなく、糞を持ち帰ることで、その牛群も持ち帰ることをあらわしている。

村では長老たちが、斥候の帰りを待っている。事前に何日後に帰ってくるという打ち合わせがあるので、当日は外に出て待ち受けているのである。斥候は帰ってくると、ウシの糞を、首長クランのメンバーのように、強力な呪力を持つ人に渡す。ついで人々に、偵察してきた情報をすべて話し、レイディングの計画をねるのである。

3. 「戦いの父」の選任

レイディングは、「戦争の父 (*iya dul*)」あるいは「火起こし棒の父 (*iya barjante*)」とよばれるリーダーに率いられる。「戦争の父」は、しばしばガラングド (*Garangudo*)、ガルレ (*Garle*)、オルモック (*Olmok*) のいずれかのクランのメンバーから選ばれる。ガラングドは、子供の誕生時の儀礼で飲む呪薬の中に矢の先を入れるので、弾丸をコントロールする力をもつと考えられている。ガラングドが「戦争の父」であれば、敵の弾は味方からそれるのだという。ガルレはクラムの儀礼首長筋であり、ウシの豊穡や病気をコントロールする力能がある。だから、彼の力によって多くのウシを奪うことができる。オルモックはガンダラブの首長筋であり、このクランのメンバーも強力な呪力を持つとされている。

4. 襲撃への道程

ホールのテリトリーから敵のキャンプまで、1日から2日以上行程である。まず、出発の日を決めると、ホールの4つの地域集団の人々は落ち合う場所を決める。そこで人々は合流し、レイディングに出発する。出発前に去勢牛を屠殺して、みなで食べ、士気を高めることもある。

パーティーを先導するのは、斥候である。老いも若きも入り混じって進むが、たいていの場合、いまだ世代組を形成していない若者たちが先行し、長老たちが後を追うという形になる。長老たちは若者たちに追いつくと、勇んで先に進もうとする若者をなだめるために、演説を行う。

「むかしはこのように戦争に行ったのか？頭を隠さねばならない。まず頭を隠して、人を殺さねばならない。急ぐな。敵のキャンプに着いたら、子供たちは後ろに戻らせろ。お前たち壮年が先に行くんだ。子供たちに牛囲いを壊させるな。イヌを育てたら、どのようにして獣を捕らえるかを教えるのは、その父親だ。お前たち壮年の年齢組は、すでにやり方を知っているはずだ…」

こうして、子供たちを老人たちの背後に配し、攻撃の準備を整える。襲撃ルートの要所には、村に至るまで、人が配置されている。奪ったウシを次々と追い立てていくためである。

目的地の牧畜キャンプの近くに到着すると、本隊は後部に控える。「戦争の父」は、まず斥候を送り出す。斥候は、夕方ウシがキャンプに入るのを追っていく。そしてウシがキャンプに入ったのを見届けて、本隊のところに戻ってくる。それを合図に人々は移動し、夜中にキャンプを遠巻きに包囲する。そして夜明けを待つ。

5. 儀礼首長の呪力

レイディングは、レイディング・パーティの実力行使のみによって成功するわけではない。彼らの攻撃に不可欠なのは、儀礼首長の呪力による防御と攻撃である。

ホールでは、儀礼首長は「女性」である、といわれている。儀礼首長が、槍やナイフ、銃などの武器を持ったり戦いに加わったりすることを、厳重なタブーとするからである。しかし、ホールの最大の武器は、その儀礼首長の呪力なのである。儀礼首長の呪力は、ホールを敵から守り、敵に決定的なダメージを与えるといわれる。

レイディング・パーティが出発すると、子供を持つ女たちは、儀礼用の装束である皮の肩掛け (*sara*) とスカート (*okko*)、そしてタカラ貝のびっしりと縫いつけられたベルト (*machi*) を身につけて、儀礼首長の家に集まる。そして首長とともに、敵への呪いと子供たちの加護を神に祈るのである。下記は、呪詛の一例である。

神よ、ボラナを滅ぼしたまえ

(boran waake baabiiso)

神よ、ボラナを滅ぼすものを、その上に降らせよ

(boran waake waha usu baabaasa ai al gatto)

神よ、ボラナを破壊したまえ

(boran waake kibiso)

神よ、(ボラナをして) われわれの戦士を畏怖するようにせしめよ

(waake bii tanno ai yuuriso)

こうした呪詛 (*fal*) は、レイディング・パーティよりも早く敵地に到達し、戦う前に敵の戦力を大きく減ずるのだといわれている。

6. 襲撃

敵のキャンプを夜中に包囲した人々は、夜明け前に攻撃を開始する。攻撃の前に、まず、「戦争の父」が、火起こし棒で枯草を燃やして、火を起こす。だから彼は、「火起こし棒の父」ともよばれるのである。人々はその火をつぎつぎに踏みつけて、敵のキャンプへむけて突撃する。この火を焚くことで、戦士たちは敵の弾に倒れないのだといわれる。また、この火は敵の牧畜キャンプに焚かれている火をあらわしており、それを踏み消すのは、牧畜キャンプぜんぶをすでにこちらに奪ったということであらわすという。

誰がどの方角に発砲するのか、どちら側から攻撃して、ウシを囲いの中から放つのか、事前に攻撃の計画は、十分に練られている。キャンプに突入し、牛囲いからウシが放たれると、あらかじめ待機している人々が、つぎつぎにウシを追っていく。前方で戦っていた者は、敵の追手に対して応戦をしながら、後退していく。

敵を殺した場合は、メーラット (*meerat*) という凱歌を歌って帰る。逆に味方が殺された場合は、遺体と衣服をそこに残す。そして可能ならば、銃、腕輪、ビーズの首飾り、サンダル、ガンベルト、携帯用の椅子など、のこりの身の回り品はすべて持ち帰る。

7. 略奪品の分配

略奪が成功し、安全な低地まで帰ってくると、略奪品の分配を行う。以下は、1990年代初めにハマルと共謀してボラナヘレイディングしたときの、分配のようすを語ったものである。このときはまず、ハマルとホールの間で分配がおこなわれ、ついでホールの中で年齢組の順に分配がなされている。

…チャルビまで来たら、とても多くのウシと人間がやってくる場所だった。われわれはボラナの牧畜キャンプまで到着することはできなかったのだ。やってきてみたら、攻撃する相手もない。ウシはハマルとビルビロ (*Bilbilo*) (ホールのうち、クラムとマルレの村落のある場所の地名) の人々がみんな奪って連れてきた。

チャルビの間あたりにある、コーランテ・ガルサンテ (*Koorante Garsante*) というところに来たら、分配が始まった。

まず始めに、ハマルとわれわれの間で分配する。ハマルたちは自分たちのものを持っていった。中くらいの牛など、非常に多くを持っていった。小さめのウシは、アルボレみんなには分配がまわってこない。ビルビロの人たちにまわるのだ。

ウシはハマルにはハマルの分、ビルビロにはビルビロの分がある。そこで、ちょっとした対立が起きた。去勢牛、とても大きな去勢牛を数えたら84頭いた。これを分配しよう。ハマルにもハマルの分を、ホールにもホールの分を。ハマルはよしといった。よしと言って、向こうへ行ったが、また戻ってきた。そしてこちらへ銃を一発撃った。われわれもあちらへ向けて銃を一発撃った。それからハマルの老人たちが、やめろと仲裁に入った。

「やめろ。それは正しいやり方じゃない。われわれはさっきともに戦った。それからここで、われわれの間で戦闘になったらどうなる。止めろ」、と言った。

さて、ここから牛の奪い合いが始まった。

ハマルたちは向こうに、われわれはこちらに分かれ、ウシの角をつかんで一個所に集める。そしてウシの中に、今は死んでしまったが、ホールの男が立って、銃を撃つ。ウシに対してでなく、人に対してでもなく、上に向かって3発銃を撃った。ウシは驚いて走り出す。ハマルの方に行くのはハマルが、ホールの方に行くのはホールがつかまえ、分配した。こうしてハマルは自分たちのウシを持って行き、ホールは自分たちのウシを持って帰った。

この話者はガンダラブの人間である。レイディングに参加しようと駆けつけたが、すでにハマルとビルビロ（地名。マルレとクラムの集落がある）の人間たちが、略奪を終えてウシの分配を始めようとしていた。ハマルとホールの間での分配をめぐり、対立が起きそうになったが、ハマルの老人の仲裁で、これはおさまった。そこでまず、ハマルの取り分とホールの取り分を分けた。次いでホールの中での分配が始まる。

そして少し離れたところに集めておいた。

人々の中には、ギダマ (Gidama) やオッバルシャ (Obbarsha) などの年長者がいる。(このときのホールの世代組には、上から順に、オッバルシャ、ギダマ、マロレ、ワターニアという4つの年齢組があった)。ガンダラブから1人、クラムから1人、ムラレから1人、エグデから1人ウシを分配に出る。ガンダラブに1頭、クラムに1頭、ムラレに1頭、エグデに1頭と、ウシを分けた。これは(それぞれの集落で)屠殺するぶんだ。

それから年長者たちにウシを分配した。3頭ずつだ。2頭の仔ウシと、1頭の去勢牛、あるいは雄ウシだ。オッバルシャ、ギダマと分配して行って、マロレに分配し終える前に、若者が立ちあがって、ウシの真ん中に来て、銃を撃ち始めた。

誰でもそれからは力でウシを奪うのだ。

このままでは、自分ら年少者までは分け前が来ない。手ぶらのままで帰るのか?と行って銃を撃ったんだ。

そこで自分たちで立ち上がり、3発の銃を撃った。

やめろと俺は言った。しかし聞きはしない。ちょっと待て、と言って、二人に分配した。するとまた銃を撃ち始めた。

こうしてウシは驚いて走り出し、ウシを手に入れる者もいれば、手に入れられない者もいる。5頭を手にする者もいるし、4頭を手に入れる者もいる。1頭も手に入れられない者もいる。俺は3頭手に入った。始め3頭手に入れたが、1頭小さな仔ウシがいて、とうとう逃げられた。そこで2頭を持って帰った。

そして夜にビルビロに帰り着いた。分配したものは、家に連れていった。

こうして集落で屠殺するものは屠殺する。

それぞれの集落のためにととっておいた4頭のウシは、競争の最中に誰かが持って行ってしまった。誰が持って行ったのかは分からない。屠殺しようとしたのだけれど、誰が持って帰ったのか、もう出てこない。

ウシの分配は、通常次のようにおこなわれる。まず、各集落に持ち帰る去勢牛を1頭ずつ取り分けておく。これは集落に残り、戦いで勝利を祈願していた長老たちのために屠殺する分である。さらに偵察に行った者たちにウシを与える。その後年長の年齢組のメンバーから順にウシを分配し、最も若い年齢組になると、銃を空に向けて放ち、それを合図に力づくでの奪い合いになる。

それぞれの集落にウシを持ち帰った後、集団の儀礼首長に与えるウシを2頭選ぶ。年齢組のリーダー格の者たちが、略奪して来たウシの中から適切なウシを選び、その持ち主に供出するように命令するのである。ガンダラブからはガンダラブの儀礼首長のために2頭、クラムからはクラムの儀礼首長のために2頭与える。

ハイレセラシエの帝政時代には、政府の役人である高地人に「賄賂」として与えるウシも、とっておかれた。まず長老たちが、最初に各集落のために分配された去勢牛を屠殺して、神に祈る。次いでショーミ (*shoomi*。アムハラ後で *shum* といい、帝国の異民族支配のための行政機構の末端に位置する土着の行政官。徴税などで、土着社会と帝国行政府の仲介にあたる) に、集落に持ち帰ったウシの中から2頭ほど提供し、高地人の行政官に渡すように言う。政府が紛争に介入し、略奪したウシを強制的に相手側に返還させることのないように、目こぼしをしてもらうための賄賂である。

以上のような段階をへて、略奪品の分配がおこなわれる。しかし、レイディングにおいて敵を殺した場合は、さらにいくつかの儀礼をおこなう必要がある。つぎに、これらの儀礼について述べよう。

(3) 戦いの後の儀礼

(A) 敵の血の穢れを祓う

敵を殺した者は、集落に帰ると、自分の家のウシ囲いの門をくぐる前に、血の穢れを祓わねばならない。雄ヤギを殺して、その血を身体にふりかける。このヤギをクバ (*kuba*) という。殺したヤギは、そのまま投げ捨て、野獣が食べるにまかせる。次に水とミルクを混ぜたもの (*err*) を、母親がメデルテ (*mederte Cordia sinensis Lam.*) という木の枝で、殺人者の身体にふりかける。殺人者の身体は、死んだ敵の血で熱くなっている。それを、女性・水分・冷たさを象徴する木を使い、水とミルクの混合物をふりかけて冷たくするのである。このようにして血の穢れを取り除いてから、家の牛囲いの門をくぐる。

(B) 殺しの栄誉をたたえる

家の前でオスヤギを屠殺する。これはアフカ (*afka*) といい、その血をヒョウタンの容器に入れ、それに指輪や腕輪を入れておく。これは後に、彼が身につけるのである。血が乾くと粉にして、バターと混ぜて殺人者の頭に塗る。

殺人者は、髪を全て剃り、大きく真っ白なダチョウの羽 (*esonte*) をたてた皮のヘアバンド (*koricha*) をつけている。首にはキリンのシッポの首飾り (*debech*) をつけ、上半身にはタカラ貝の縫いつけられた皮の紐 (*laaba*) をたすきがけにしている。腰には母親がつけていた、タカラ貝びっすりついたのベルト (*machi*) をもらいうけてつけている。額に黄色の土 (*suur*)、目の上に白い土、目の下には赤い土を塗る。右腕の半ばくらいまで金属製の腕輪 (*mida*) をつけ、二の腕にも象牙の腕輪 (*harbor*) をたくさんつける。さらにヤギの皮の紐 (*chilam*) を両手の二の腕だけでなく、身体中に

つけるのである。そして足首には鈴 (*horrai*) をつける。この派手な装束全体をララットウ (*rarattu*) といい、遠目にも彼が人を殺したことは一目瞭然となる。彼は殺しを祝う歌であるメーラット (*meerat*) を歌う。そしてこの装束のまま槍をかついで、放牧に出かけるのである。

(C) 「殺し名」の授与と癍痕を彫る

この後にも、殺人者の威信を高める儀礼がある。去勢牛を屠殺し、世代組のメンバーたちと共食する儀礼である。このとき屠殺する去勢牛をイェルミット (*yermit*) という。そしてこのとき屠殺したウシの毛色、あるいは殺しの状況にちなんだ名前 (*yermit*) を、殺人者に与える。それ以降彼は、仲間たちから「殺し名」によって呼ばれるようになる。さらに彼は、胸に細かい無数の癍痕を入れる。これをチェッド (*ched*) という。

(D) 敵の血の力を売買する

殺した相手が、マーレのように「血の甘い」敵である場合、ホールは相手のペニスを切り取って持ち帰る。敵を殺したときにペニスを切り取るのは、殺人者の友人である。殺した本人が切り取るのは、タブーであるとされる。殺人者とその友人は、ミソ (*miso*) という関係となる。彼らは敵の血によって、豊穡の力を獲得したと考えられる。

集落に帰り、血の穢れを祓った後、殺人者はミソとなった友人から、敵のペニスを未経産牛によって「買う」。そして持ち帰ったペニスをアカシアの木につりさげる。殺人者、友人、ペニスをつりさげたアカシアの木の三者は、アガス (*agas*) という関係になる。これはタブーにつつまれた関係であり、アガス間では暴力をふるってはならないし、子々孫々通婚することができなくなる。

殺された敵の豊穡の力と、それを殺した者の殺人者としての威信を、第三者が「買い取る」ことができる。このときの儀礼をメエ・ファキン (*mee fakin*) という。買い手は儀礼のためのハチミツ酒などを準備し、長老や親族たちを招待する。売り手である殺人者は、夜中にメーラットを歌い、敵のペニスを手にした彼のミソとともに、買い手のところにやって来る。買い手もメーラットを歌い、自分の「ミソ」とともに待ち受ける。売り手側と買い手側は、模擬戦を行う。買い手側は売り手である殺人者を倒し、買い手の「ミソ」がそのペニスを切り取るしぐさをする。こうして買い手は、殺人者の栄誉と、敵の血の豊穡の力を手に入れる。買い手は売り手に未経産牛を「支払い」、両者はアガスとなる。

翌日あらたな「殺人者」となった買い手は、ペニスを母方オジ (*au*) のところへもってゆき、その代償に未経産牛を手に入れる。さらに親族などから3頭の未経産牛を手に入れ、計4頭のウシを集落の外のアカシアの木につなぐ。そしてそれを自分のウシ囲いに持ち帰る。これらのウシは殺された敵をあらわしている。これらのウシを「黒い口 (*oha wati*)」とよび、女性がその乳を飲んではいない、そのウシのいるウシ囲いでは暴力沙汰をしてはならないなどのタブーがかけられる。

ホールの儀礼首長は、首長位を継ぐと、完璧な儀礼首長となるために、メエ・ファキンの儀礼をし、象徴的な「敵の殺人者」にならねばならないと言われている。

これら一連の儀礼には、敵を殺すことについての、いくつかの異なった文化的意味づけを見ること

ができる。

第一に、「殺し」というものにかかわる穢れについてである。戦場で敵を殺すことは良いことであり、敵に殺され戦死することも、決して悪い死であると、ホールは考えない。しかしいずれにせよ、人の手によって血を流すということは忌まわしいことであり、それは集落に直接持ち込まれてはならない。戦死した味方の死体は、戦場に放置され、野獣が食べるにまかされる。敵を殺して帰ったときも、血の穢れを祓う儀礼が必要となる。

第二は、敵を殺すことによって得られる威信である。殺人者は、メーラットという凱歌を歌い、ララットゥという殺しの装束を身にまとう。これによって彼は、自分の勇猛さ、男らしさを仲間にアピールする。さらに「殺し名」と「癒痕」によって、殺人者としての地位をみずから名前と身体に刻み込み、自分のアイデンティティの一部とする。

第三は、マーレのような敵を殺すことによって得られる豊穣の力である。これは自分だけでなく、他の人々に及ぶこともある (Tadesse 1997)。またこの力は、メエ・ファキンの儀礼により、第三者に譲渡することができる。儀礼首長がこの儀礼を行うことによって、敵から奪った豊穣の力は、ホール全体を祝福するものとなる。ホールは「敵の血はホールにとって甘く、ホールの血も敵にとって甘い。ホールと敵は互いに血を求めあう。」という。敵の血に豊穣性があるという考えの背後には、敵をホールの鏡像的な対立物であり、どちらも同じ神による秩序に属しているとする観念がうかがえる。

ホールにとって、敵とは自己の民族アイデンティティを維持するために必要なものである。ひとつはそれが、集団の中心に取り込まれ、その一部となり、集団の豊穣と繁栄を保証するからである。さらに、敵のイメージは、自らの鏡像的イメージと重なり、それを創造した神による秩序だった世界を連想させるのである。こうした秩序の世界に、他の民族とともに適切に位置づけられるのが、ホールの集団としてのアイデンティティを保証するのである。

3 おわりに一戦いのイデオロギーの解釈に向けて

さて以上で、ホールの戦いのあり方を、その動機、防御の方法、レイディング・パーティの結成にいたるプロセス、レイディングの方法、略奪品の分配、敵を殺した場合の儀礼について述べてきた。戦いの動機としては、豊穣の力を求める殺人、威信を求める殺人、ウシの盗みにともなう殺人、復讐のための殺人をあげた。また敵を殺すことは、儀礼によって確固とした意味を与えられる。それによって殺人者は、個人的な威信を手に入れることができる。さらに「甘い血」をもつ敵を殺すことは、首長がそれを「買う」ことにより、集団としてのアイデンティティを確固としたものにする。

さて、ここで提示したのは、現在人々の語るレイディングのありかたを聞き、そこから一般化して構成したモデルである。このようなモデルを通してのみ民族間関係を考えると、民族間の戦いはいかにも、内発的な動機づけによって引き起こされているかのように思える。すなわちホールがよく口にする、敵の殺害による豊穣の獲得という「迷信」、殺しによる威信の獲得という「マクスモ的価値観」、ウシへの渴望という「ウシ複合文化的価値観」である。これに暴力による復讐という、国家という統治機関を欠いた「部族社会」の防衛メカニズムが加わる。ホールのテリトリー防衛や略奪のシステムがシステムティックであるだけに、ホールはかなり好戦的な民族に見えるかもしれない。しかしじっさいは、そうではない。そもそもホールは自らを「平和 (nagai) と秩序 (aada) を尊ぶ者たち」とも

言うのである。この自己像の矛盾は何だろうか。そして、実際のホールの戦いは、どのようなものだったのだろうか。初めに述べたように、ホールのかかわった民族間戦争を詳細に検討するならば、戦争の生じる政治的文脈に、エチオピア帝国とのかかわりが重要な影響を及ぼしていることが明らかになる。このイデオロギーと現実の間の乖離と齟齬については、別稿において詳細に検討することにした。

参考文献

Baxter, P.T.W.

1977 Boran Age Sets and Warfare. In *Warfare among East African Herders, Senri Ethnological Studies no.3*. Fukui K., and D.Turton (eds), pp 69-96., Osaka: National Museum of Ethnology.

Collins, R.O. 1961 The Turkana Patrol, 1918. *Uganda Journal* 25:, pp 16-33.

Donham, Donald and Wendy James.

1986 *The Southern Marches of Imperial Ethiopia.*, Cambridge : Cambridge University Press.

Fukui, Katsuyoshi

1977 Cattle Colour Symbolism and Inter-Tribal Homicide among the Bodi. In *Warfare among East African Herders, Senri Ethnological Studies no.3*. Fukui K., and D.Turton (eds), pp 147-178., Osaka: National Museum of Ethnology.

Fukui, Katsuyoshi and John Markakis. 1994 *Ethnicity and Conflict in the Horn of Africa.*, London : James Currey.

Fukui, Katsuyoshi and David Turton.

1977 *Warfare among East African Herders, Senri Ethnological Studies no.3.*, Osaka : National Museum of Ethnology.

Garretson, Peter

1986 Vicious Cycles: Ivory, Slaves, and Arms on the New Maji Frontier. In *The Southern Marches of Imperial Ethiopia*. Donham, D., and W.James (eds), pp 196-218., Cambridge: Cambridge University Press.

Kurimoto, Eisei and Simon Simonse.

1998 *Conflict, Age & Power in North East Africa.*, Oxford : James Currey.

Tadesse, Wolde

1997 Cowrie Belts and Kalashnikovs. In *Ethiopia in Broader Perspective, Volume 2, Papers of the 13th International Conference in Ethiopian Studies*. Fukui K, E. Kurimoto, M. Shigeta (eds), pp 670-687., Kyoto: Nakanishi Printing.

Tornay, Serge

1977 Armed Conflicts in the Lower Omo Valley, 1970-1976: An Analysis from within Nyangatom Society. In *Warfare among East African Herders, Senri Ethnological Studies no.3*. Fukui K., and D. Turton (eds), pp 97-118., Osaka: National Museum of Ethnology.

Turton, David

1977 War, Peace and Mursi Identity. In *Warfare among East African Herders, Senri Ethnological Studies no.3*. Fukui K, and D.Turton (eds), pp 179-210., Osaka: National Museum of Ethnology.

Turton, David

1994 Mursi Political Identity and Warfare. In *Ethnicity and Conflict in the Horn of Africa*. Fukui K., and J. Markakis (eds), pp 15-32., London: James Currey.

福井勝義

1999 「オモ川・ナイル川流域におけるエスノシステム—錯綜する民族名と民族間関係の解読に向けて」 『季刊 民族学』 90: pp 28-50.